

Hirosaki  
MOCA  
Letter

vol.04

TAKE FREE

# 弘前 れんが倉庫 通信

弘前れんが倉庫美術館を  
もっと楽しむフリーペーパー

特集：2021-22 H-MOCA 展覧会レビュー

この土地を覆う長い灰色の季節。

光は遠ざかり、あらゆるものの輪郭は曖昧のなかに埋もれ、影を失くす。

冬風の陽射しを受けて、あるがままの姿を雪面へと伸ばす一瞬を待ちわびながら。

季節はめぐり、青々とした葉を茂らす木々が、秋の日にはたくさんの実を生らすだろう。

やがてその実は落ち、土へと還る。降り重なる雪を、再び受けとめるための準備を始める。





ケリス・ウィン・エヴァンス 《Drawing in Light (and Time) ... suspended》 2020年

撮影・ToLoLo studio

弘前れんが倉庫美術館が開館する前の2019年、アーティストのケリス・ウィン・エヴァンスさんは弘前を訪れました。改修工事中の煉瓦倉庫やりんご公園などで

のリサーチを経て、吹抜けの展示室に合わせて高さ約7mの巨大なネオン彫刻を制作。まばゆい光を放つ本作は、「りんご宇宙-Apple Cycle / Cosmic Seed」と

「りんご前線-Hirosaki Encounters」、2つの展覧会にわたり展示され、当館のコレクション作品のひとつとなっています。



# りんご宇宙

## -Apple Cycle / Cosmic Seed

2021年度展覧会「春夏プログラム」  
りんご宇宙  
-Apple Cycle / Cosmic Seed  
2021.4.10-8.29

雨宮庸介  
ケリス・ウィン・エヴァンス  
河口龍夫  
タカノ綾  
和田礼治郎  
+  
ジャン＝ミシェル・オトニエル  
笹本晃  
潘逸舟（ハン・イシュ）

### 嵐の後に残るもの

「りんごの主題は、どこかで向き合わなければならぬものであった」と本展キュレーター三木あき子氏が語るように、展示場所が持つローカルな特色をいかに普遍的なテーマや問題提起へとつなげるかは、アーティストやキュレーターにとって今や定番の課題になった。「りんご宇宙」展も、弘前という土地、元シールド工場という美術館の特性に向き合いつつ、それを外に開いていくことを試みた展覧会だ。



雨宮庸介《チャールズのかしの木座にりんごの実のなる》2021年



河口龍夫《関係—鉛の郵便・ふた粒のりんご》1988年

[Artists] AMEMIYA Yosuke, Cerith WYN EVANS, KAWAGUCHI Tatsuo, TAKANO Aya, WADA Reijiro, Jean-Michel OTHONIEL, SASAMOTO Aki, HAN Ishu

やや乱暴に分類すると、本展出品作家のうち、もともと以前から素材やモチーフとしてりんごを扱っていたことで招聘されたと思われるのが、河口龍夫、和田礼治郎、雨宮庸介。作品に直接的にりんごが登場することで、かえって、制作における方法論や関心の違いが際立った。いずれもりんごの文字通りの表象ではなく、目には見えないもの、言語や時間を扱うことで、地域性を超えた奥行きを展覧会に与えている。

弘前をリサーチ・視察したり、市民とワークショップを行ったりして、土地に応えるべく制作したのが、ジャン＝ミシェル・オトニエル、ケリス・ウィン・エヴァンス、タカノ綾、潘逸舟だ。オトニエル、ウィン・エヴァンス、タカノの制作が、抽象度が高く非政治的で祝祭的な彫刻や絵画へと結実したのに対して、弘前に縁がありながらも、均質的な日本では「外から来た者」としてカテゴライズされてきたであろう潘は、

「外からやってくるものは、いつその土地の固有の文化として定着するのか」という問いを、真摯に投げかけていた。

また、美術館前庭から展示室2階まで縦横無尽に使い切った笹本晃のパフォーマンスは、場の固有性に応えつつ、空間に新たな息吹を吹きこんだ。母／作家としての責任や周囲からの期待とプレッシャーを、温度や気圧、風に例え、40歳を迎えた自らのうちに渦巻く表現者と



ジャン＝ミシェル・オトニエル《エデンの結び目》2020年



タカノ綾《円舞、りんごの輪、光の輪》2021年、《根源の近く》2017年、《円舞、宇宙の輪、光の輪》2021年

からこそ、自身にとって真に切実な問いを通して世界と接続していくことが求められているように思う。

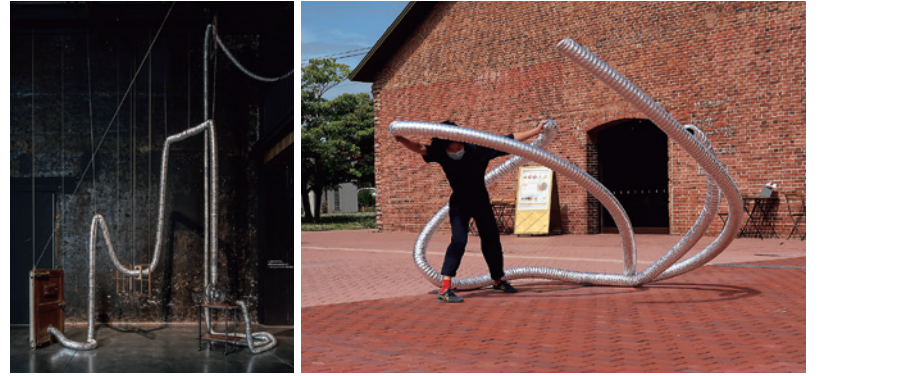
外山有菜  
(十和田市現代美術館アシスタント・キュレーター)



和田礼治郎《ヴァニタス》2021年



潘逸舟《おにっこのちはりんごジュースの滝》2021年



笹本晃《スピリッツの3乗》2020年 笹本晃によるパフォーマンス風景

## 特集 | FEATURE 2021-22 H-MOCA 展覧会レビュー

開館2年目となった2021年度は、2つの展覧会を開催しました。青森県内の学芸員によるレビューと共に展覧会を振り返ります。

# りんご前線

## -Hirosaki Encounters

2021年度展覧会「秋冬プログラム」  
りんご前線  
-Hirosaki Encounters  
2021.10.1-2022.3.13

小林エリカ  
齋藤麗  
佐野ぬい  
塚本悦雄  
村上善男  
+  
ケリス・ウィン・エヴァンス

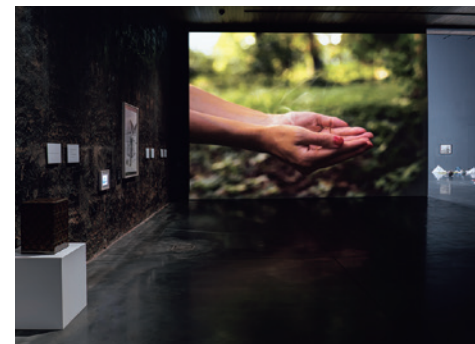
空間構成：蟻塚学  
建築写真撮影：柴田祥



佐野ぬい「明日のテーマ」2021年

### 幽霊はりんごしか食べない

つまるところ過去・現在・未来は等価である。「りんご前線」はそこで動く。佐野ぬい「明日のテーマ」におけるロッキングチェアは過去と未来を行き来する揺りかご。画業70年を経た作品の青は、輝きと透明さを増す一方で透明ゆえに絵画表層に留まり、画面に不在の奥行き—幽霊をまよわせる。今ここにある進捗と停滞の不思議さを見よ。そのとき本展示は時空間を素材に描かれた作家のタブローそのものとなる。



小林エリカ「旅の終わりは恋するものの巡り逢い」2021年

小林エリカ「旅の終わりは恋するものの巡り逢い」は、誤解を恐れずいえば幽霊をまなざす作品。本作素材のうち写真、映像、テキストには共通要素があって、それは複製可能な断片ということだ。断片は多いほど不在の主体—幽霊を弱々しくも確かな形で現実へ想起させる。そこでオブジェやドローイングとは不在を受肉するための白々とひそやかな骨。それらは作品体験を鑑賞者が分有する展示行為を介して、作品



齋藤麗「ウィンター・ドーナツ/イワキサン」2021年

を私たちの存在をめぐる物語として再帰させる。齋藤麗「ウィンター・ドーナツ/イワキサン」もそうした再帰性を手がかりに、身近な素材を駆使して弘前の土壌（テロワール）を鑑賞者に分有する作品として見るができるだろう。こうしたグループ展はともすれば鑑賞者に自閉した印象を与えるが、前線—複数の状況下において複数のモノが入り混じる場—が接続された本展はそうした印象から遠い。弘前で培わ



村上善男「北奥百景」2021年

れた村上善男の種々の仕事の断片で構成される「北奥百景」。会場内仮設の彫刻スタジオで自らを促成栽培されるりんごになぞらえ、近代彫刻を換骨奪胎するかのような制作に取り組んだ塚本悦雄の「津軽モンタージュ」。そして「弘前エクスチェンジ#04 りんごのテロワール（土壌）についての試考」が地域からの応答として実によく効いている。ケリス・ウィン・エヴァンス作品が示した、それら一切を展示空間内で



塚本悦雄「津軽モンタージュ」2021年

つなぐ軸木としての役割も見逃せない。個々に細かくふれることができないのが心残りだが、地域の過去を掘き込み現在から未来を育む意志がにじむ本展は、かつての／これからの幽霊としての私たちが、自ら生み出し自らを養うことができる数少ない滋養あふれる果実そのものであった。

奥脇高夫（青森県立美術館学芸員）



「弘前エクスチェンジ#04 りんごのテロワール（土壌）についての試考」

### PICK UP! 鑑賞後の楽しみ!

隣接するカフェ・ショップでは、特別展示や期間限定デザートの提供、展覧会ブックレットの販売なども。たくさんの方に展覧会の「余韻」を味わっていただきました。



テーブルや壁面にはりんごにまつわる雨宮庸介さんの作品が展示された。



りんごの形が特徴のアップルパイは南部鉄器の専用クッカーで焼かれたもの。

### VOICE: 来館者の感想

「何度見ても見飽きないものがたくさんあった。広くて大きい部屋を使い回すことなく使っていたのが凄かった。」  
長尾怜央菜さん（中学1年生）

（小林エリカの作品《クローバラ》について）「木や草と墓があった。その墓がきれいでも木や草もきれいだった。説明文に『コナン・ドイルは死後の世界を信じていた』というのがあって、とても幻想的な感じがした。」  
五十嵐侑希さん（中学2年生）

（塚本悦雄の作品《ツガルビューティー》について）「曲線がなめらかで生き物の美しさそのまま現れたようでとてもきれいだった。」  
「弘前市立博物館で見た昔の作品と弘前れんが倉庫美術館で見た現代の作品で、どちらも感じるものは違うけど、きれいな美しいと思うことは一緒だったので考え方は今も昔でも一緒だった。」  
下山君平さん（中学2年生）

「最初の展示室から圧倒されていました。ひとつひとつの作品から思いが感じられました。また行きたいです。」  
対馬涼月さん（中学2年生）



PICK UP!  
PEOPLE

美術館とまちをつなぐ  
わたし・アート・まち

## ラウシェンバーグとセカール 展覧会で感じた多様性の面白さ

太平洋画房 山脇 則子さん



忘れられない2つの美術展があります。ひとつは1986年、東京の世田谷美術館での「ラウシェンバーグ ROCI(ロッキー) 日本展」、もうひとつは、2004年、弘前のデネガでの「ズビネック・セカール展」です。

ロバート・ラウシェンバーグ(1925-2008)は、アメリカの美術家でポップアートの先駆者。ROCIは、自ら「芸術による平和外交」と呼んだ展覧会で、世界が抱える問題を柔らかく、優しく表現していることに感銘を受けました。そして、ズビネック・セカール(1923-1998)は反ナチス運動にかかわり、強制収容所を経験したチェコの美術家。デネガで展示された金属製の彫刻作品は、実際よりもずっと重く見えました。孤独感に満ち、静かだけれど、力強く語りかけてきました。



2人の作品の根底には、平和への願いが込められていますが、印象は正反対。そこに表現の多様性の面白さを実感しました。いろんなジャンルがあつてこそ世の中は面白いものです。当店に画材を買いにいらっしゃるお客様のニーズもいろいろ。さまざまな表現のお役に立てよう努めています。(談)

### 【太平洋画房】

山脇さんのお父さんが1952年に開業した老舗の画材店。絵画、版画、彫塑などあらゆるジャンルの画材を取り揃えています。

弘前市富田1-5-3  
TEL.0172-32-3590  
時間10:00-18:30  
毎週水曜日定休



撮影・成田写真事務所

## Exhibition information 展覧会情報

2022年度 春夏プログラム 池田亮司 展

会期: 2022年4月16日(土)~8月28日(日)

### 弘前れんが倉庫美術館

[開館時間] 9:00~17:00 ※但し、金曜日・土曜日に限りスタジオ、ライブラリーのみ21:00まで開館

[休館日] 火曜日(祝日の場合は翌日に振替)、年末年始

〒036-8188 青森県弘前市吉野町2-1 [TEL] 0172-32-8950 [Mail] info@hirosaki-moca.jp

[駐車場] 思いやり駐車場2台 ※お車でお越しの際は近隣の有料駐車場をご利用ください

[表紙写真] 撮影: 畠山直哉

[編集協力] ものの芽舎 [デザイン] デザイン工房エスパス [印刷] 凸版メディア株式会社

[編集・発行] 弘前れんが倉庫美術館(指定管理者 運営業務担当 エヌ・アンド・エー株式会社) [発行日] 2022年3月1日

STAFF  
VOICE

美術館のおしごとアレコレ  
スタッフに聞きました!

## 弘前れんが倉庫美術館 Members #04

運営チーム 山田谷 さと美



「思ったら、まずやってみる」が山田谷さと美さんの信条。それは経歴からも伝わってきます。

津軽で生まれ育ち、東京の短大に進学。帰郷後、広告代理店に20年、営業職として勤務。しかし、「もっと学びたい」という思いから、弘前大学に社会人入学をします。在学中、フランスのボルドーに留学。そして、2020年春に開館準備を進める弘前れんが倉庫美術館へ。

山田谷さんは現在、運営スタッフとして、広報から展覧会運営、地域連携活動など幅広く業務をこなしており、美術館のファンを増やすためのメンバーシップ「H-MOCAメンバーズ」の法人部門も担当しています。美術館活動を知ってもらおう、応援してもらおうと、企業に呼びかけています。

「美術作品の見方に正解はないはず。感じることや好奇心を持つこと、自分で考えることが、きっと心を豊かにしてくれます」そんな思いを伝えていきたいと話しています。

聞き手・佐藤史隆(タウン誌発行人) 撮影・成田写真事務所

## Event report イベント報告

### H-MOCAライブ Vol.6

トーク「レコードジャケットが教えてくれたアートのこと」

実施日: 2021年12月18日



レコード店「JOY-POPS」オーナーの齋藤浩さんと、シークレットゲストには現代美術家の奈良美智さんが登壇。思い入れのあるレコードジャケットを紹介し、50年来の付き合いがある二人ならではの音楽談義が展開されました。

撮影・shota odagiri

霧の中で《旅の終わりは恋するものの巡り逢い》を鑑賞する会  
実施日: 2022年1月9日



「りんご前線 -Hirosaki Encounters」参加アーティストの小林エリカさんによるパフォーマンス。幻想的な霧に包まれた展示室でテキストの朗読が行われました。美術館では展覧会のほかに、さまざまな関連プログラムも開催しています。

撮影・柴田祥

HIROSAKI  
MUSEUM OF CONTEMPORARY  
ART